



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ハンムラビ紀年を廻る最近の研究                                                                   |
| Author(s)        | 板倉, 勝正                                                                            |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要, 4, 95-106                                                             |
| Issue Date       | 1955                                                                              |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33226">https://hdl.handle.net/2115/33226</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 4_P95-106.pdf                                                                     |



ハンムラビ紀年を廻る最近の研究

板

倉

勝

正

# ハンムラビ紀年を廻る最近の研究

板 倉 勝 正

オリエントの紀年は最近著しい変改を蒙つた。それは一つには比較層位学的研究の発達によつてその上限が引下げられ且著しくその確実性を増したこと、二つには新史料の発見とそれに基づく旧史料の再検討とによつて従来最も不明であつた前二千年紀前半の紀年が明確にされたこととに拠る。特にマリ Mari 文書の発見とコルサバッド王名表 Chorsabad List の発表とは、バビロン第一王朝の年代をほぼ二世紀引下げ、これによつて嘗てオリエントを通じて認められた不可解な空白 (アマルナ時代以前の二世紀は全く史料を欠き所謂蠻族支配の下における暗黒時代と考へられてゐた) は実は存在しなかつたことが明らかにされた。しかしなほその中心となるバビロン第一王朝の紀年については相当大きな見解の相違があり、且つその論拠も複雑多岐であつて、その一致は容易に望めない現状にある。以下はこの「解き難い複雑な」問題<sup>(\*)</sup>についての研究史的メモにすぎない。なお本稿において書名・雑誌名の略符号は慣例により、又人名・地名の翻字 Transcription はそれぞれの著者の用ひる処に従つて敢へて統一しなかつた。<sup>(\*\*\*)</sup>

- (\*) cf. V. G. Childe : New Light on the most Ancient East (1954)
- (\*\*) Th. Jacobsen : The Sumerian King List (1939) p. 191.
- (\*\*\*) 名 Bibliographie des Sumeriens Jacobsen, op. cit.
- A. Moortgat : Aegypten und Vorderasien (1951) A. Parrot, Archéologie Mesopotamienne II (1953) 等 Bibliographie des Mes.

## [I]

バビロン第一王朝 (ハンムラビ王朝) の紀年<sup>(1)</sup>はバビロニヤ・アッシリヤ史にとつて特に重要な地位を占めてゐる。それは重要なシュメル王名表の殆んどすべてがこの王朝の直前に編纂されて居り、又バビロニヤ紀年の骨格をなす王名表 A がこの王朝を起点として前七世紀までを誌してゐるからである。従つてこの王朝の紀年が確定されば、これを中心としてそれ以前および以後の紀年算定に決定的な意義をもつことは明かである。

紀年算定の基礎は第一に天文観測記録から逆算して絶対年代<sup>(4)</sup>を確定することであるが、これは確実な記録の存在とその天文学的逆算の一致とが条件であつて現在まで諸權威が一致して認めるものはアッシリヤの Innu list に見える Assur-Dan 三世の 763 B.C. の皆既日蝕のみである。<sup>(5)</sup>第二は考古学或ひは古文字学によつて行はれる Sequence dating であるが、これは単に先後關係を決定するに止り、その精密度は数十年、時に数百年を以つて数へられるにすぎない。<sup>(6)</sup>最後に残るものは矢張り文献的史料であつて、これには王名表、年名表、リンムウ表以下諸王の歴史的碑文、および公私の文書がある。<sup>(8)</sup>

(1) 第二次大戦前の紀年の代表的なものを挙げれば、

|           | A               | B         | C         |
|-----------|-----------------|-----------|-----------|
| Ur III    | c. 2290—c. 2183 | 2281—2170 | 2328—2220 |
| Babylon I | c. 2050—c. 1750 | 2057—1758 | 2105—1806 |
| Hamurapi  |                 | 1955—1913 | 2003—1961 |

- A) Th. J. Meek : Haverford Symposium on Archaeology and The Bible (1939) 159
- B) A. Ungnad : Subartu (1936) 36
- C) L. Delaporte : Le Proche-Orient Asiatique (1939) chap II  
Tableau chronologique
- (2) Th. Jacobsen : The Sumerian King List (1939) が年表を綜合せしめ取扱いた代表的研究である。
- (3) E. Meyer : Geschichte des Altertums I. 2. §§ 32ff. ders. Ältere Chronologie Babylonians, Assyrians und Aegyptians.
- (4) 従来長く最古の確定年代とされたヨシント太陽暦の採用 (4236 B. C. E. Meyer : Chronologie. 45) も最近の研究によつて疑問視されるに至つた (A. Scharf, "Bedeutungslosigkeit d. sog. ältesten Datums usw." Historische Zeitschrift 1940) など H. Bengtson : Einführung in die alte Geschichte (1949) 24. ann. 1.
- (5) A. Ungnad : "Eponymen" (Reallexikon d. Assyriologie II.) 415, 422, 430, 432 など H. R. Hall : Ancient History of the Near East (1932) 15-16 Cambridge Ancient History Vol. I. 149.
- Geschichte des Altertums, I. 2. § 432 a. etc. 「Bur-sagal の limmu 職 (Assur. Dan の治世第九年) にあつた年」マッシュタル市の叛乱「シマンの月の日蝕」とある。即ち同年六月十五日「エネヴェ」から見えた皆既日蝕である。
- limmu とはギリシヤの Archon ロール consul の如き一年交代の重要官職であつて、マッシュリヤ史における年代は殆んど limmu 名の記載があり、この制度は Kultepe 文書 (ウル第三王朝) 以来引継ぎ行はれてゐる。
- (6) 最近の R. C. の精密度が更に高められれば、紀年学は根本的に革新されるのであらうが現在の処まだ試験的段階に止る (F. E. Zeuner : Dating the Past (1951) chap X B Appendix 415 ff.
- (7) 重要事件を以て年名とするのは既にハツタル朝から始まる Thureau Dangin : Sumerische u. akkad. Könige in schriften. 225 ff.) など表を

補綴し扱ひたものは A. Ungnad : "Datenlisten" (Reallexikon der Assyriologie II 131-184) とヨシント第一王朝などの集成は M. Schorr : Urkunden des altbabylonischen Zivil- u. Prozessrechts 582-614.

- (8) 従来の紀年の基礎としてゐる E. Meyer. op. cit. S. Smith. Early History of Assyria (1927) Appendix : Chronology. pp. 343-365. 397-369. S. A. Cook : Chronology (C. A. H. I. pp. 145-156)

この中最も確実なものはマッシュリヤのレントラヒ表であつて、現存のものは Adad-nirari II (911-890 B.C.) など Assur-ban-apli (669-625 B.C.) に及んで、その年代は有名な Ptolemaios の Kanon と接続して更に確実性を増してゐる。

## II

若し確実な天文学的記録が存在し、その計算が一致を見るならば歴史家は最早絶対年代の確定について口を挟む余地はない。そこでまず天文学から始めよう。

歴史学の側から提出された最近の紀年の変化に応じて、嘗て見捨てられた Ammizadugga の金星観測記録の天文学的再検討が採り上げられるに至つた。(7) これは Assur-ban-apli の図書館出土の断簡に Ammizadugga の第六年における金星のあつた (Helical Rising) の記録であるが、諸權威の間の計算の結果が全く一致せず、かつ遙か後代の筆写であるために久しく省みられなかつたものである。(8)

バビロン第一王朝の王名、父子関係、治世年数はすべて分つてゐるから、この絶対年代が分れば全王朝のそれも亦確定する筈である。O. Neugebauer は S. Smith の紀年に対する批判において、ハントラヒ即位の年は天文学的に 1856, 1848, 1792, 1736 B.C. のいつれかの中であると(9)然るに M. B. Rowton に於いて、この同じ年が 1792, 1728, 1736, 1664 B.C. の四つの可能性があると(10)する。これらの Variation は金

# ハンムラビ紀年を廻る最近の研究

板 倉 勝 正

オリエントの紀年は最近著しい変改を蒙つた。それは一つには比較層位学的研究の発達によつてその上限が引下げられ且著しくその確実性を増したこと<sup>(\*)</sup>、二つには新史料の発見とそれに基づく旧史料の再検討によつて従来最も不明であつた前二千年紀前半の紀年が明確にされたこと<sup>(\*)</sup>に拠る。特にマリMari文書の発見とコルサバッド王名表Chorsabad Listの発表とは、バビロン第一王朝の年代をほぼ二世紀引下げ、これによつて嘗てオリエントを通じて認められた不可解な空白(アマルナ時代以前の二世紀は全く史料を缺き所謂蠻族支配の下における暗黒時代と考へられてゐた)は実は存在しなかつたことが明らかにされた。しかしなほその中心となるバビロン第一王朝の紀年については相当大きな見解の相違があり、且つその論拠も複雑多岐であつて、その一致は容易に望めない現状にある。以下はこの「解き難い複雑な」問題<sup>(\*)</sup>についての研究史的メモにすぎない。なお本稿において書名・雑誌名の略符号は慣例により、又人名・地名の翻字 Transcription はそれぞれの著者の用ひる処に従つて敢て統一しなかつた。<sup>(\*\*\*\*)</sup>

- (\*) cf. V. G. Childe : New Light on the most Ancient East (1954)
- (\*\*) Th. Jacobsen : The Sumerian King List (1939) p. 191.
- (\*\*\*) 名 Bibliographie des Sumeriens Jacobsen, op. cit.
- (\*\*\*\*) A. Moortgat : Aegypten und Vorderasien (1951) A. Parrot, Archéologie Mesopotamienne II (1953) 等 Bibliographie des Sumeriens.

北大文学部紀要

## [I]

バビロン第一王朝(ハンムラビ王朝)の紀年<sup>(1)</sup>はバビロニア・アッシリヤ史にとつて特に重要な地位を占めてゐる。それは重要なシュメル王名表の殆んどすべてがこの王朝の直前に編纂されて居り、又バビロニア紀年の骨格をなす王名表Aがこの王朝を起点として前七世紀までを誌してゐるからである。従つてこの王朝の紀年が確定されれば、これを中心としてそれ以前および以後の紀年算定に決定的な意義をもつことは明かである。

紀年算定の基礎は第一に天文観測記録から逆算して絶対年代<sup>(2)</sup>を確定することであるが、これは確実な記録の存在とその天文学的逆算の一致とが条件であつて現在まで諸權威が一致して認めるものはアッシリヤのImmu listに見えるAssur-Dan三世の763 B.C.の皆既日蝕のみである。<sup>(3)</sup>第二は考古学或ひは古文字学によつて行はれるSequence datingであるが、これは単に先後關係を決定するに止り、その精密度は数十年、時に数百年を以つて数へられるにすぎない。<sup>(4)</sup>最後に残るものは矢張り文献的史料であつて、これには王名表、年名表、リンム表以下諸王の歴史的碑文、および公私の文書がある。<sup>(5)</sup>

(1) 第二次大戦前の紀年の代表的なものを挙げれば、

|           | A               | B         | C         |
|-----------|-----------------|-----------|-----------|
| Ur III    | c. 2290—c. 2183 | 2281—2170 | 2328—2220 |
| Babylon I | c. 2050—c. 1750 | 2057—1758 | 2105—1806 |
| Hammurabi |                 | 1955—1913 | 2003—1961 |

Ⅲ

一九三五年 A. Parrot の指揮するフランス発掘隊はエウフラテス中流の古都 Mari の遺跡 (Tel Hariri) を発見し、その王宮図書館から多数の重要文書を発掘した。<sup>(1)</sup> Thureau-Dangin は直ちにこれを解説しその重要な一部を発表して学界の注目を浴びた。<sup>(2)</sup> これによつてファシリヤの Shamsi-Adad 一世は Mari の王 Jahdun-Lim と同時代であり、また Jahdun-Lim の子 Zimri-Lim は有名なハンムラビと同時代であることが明かにされた。<sup>(3)</sup> 即ちファシリヤの Shamsi-Adad I は一時 Mari を征服してその子 Jasmah-Adad をその王としたが、Shamsi-Adad の死後旧王朝が再び主権を恢復して Zimri-Lim が王位に即位したのであつてこれを表示すれば次の如くなる。

| Assur         | Mari                           | Babylon      |
|---------------|--------------------------------|--------------|
| Ilakabkabu    | Igit-Lim                       |              |
| Shamsi-Adad I | Jahdun-Lim                     | Sin-muballit |
| Ishme-Dagan I | Jasmah-Adad<br>(Shamsi-Adadの子) | Hammurabi    |
|               | Zimri-Lim<br>(Jahdun-Limの子)    |              |

即ち Shamsi-Adad I は従来考へられた如くハンムラビの死後数十年にして即位したのではなく、ハンムラビ即位以前にすでに強大な君主だつたのである。<sup>(4)</sup>

この両者の關係についての明確な証拠はなから。Zimri-Lim がファシリヤ支配を顛覆して即位したのは明らかに Shamsi-Adad I の死後であり、又年名表によれば Zimri-Lim は三十二年間統治した後ハンムラビに亡されてゐるから、この年が一般に考へられてゐる様にハンムラビ

の即位三十四年とすれば、<sup>(5)</sup> ハンムラビの即位と Zimri-Lim の復位 (Shamsi-Adad の死後) との間は僅々二、三年にすぎない。して見ると、この両者の間に生前に何等かの關係があつたとは考へられず、前者の死の直後に後者が即位したと見るのが妥当であらう。<sup>(6)</sup> それでは次に Shamsi-Adad の在位年代についてファシリヤ側の史料によつて検してみよう。

Shamsi-Adad I はファシリヤの最初の強大をなした英主であるので、<sup>(7)</sup> 後代の諸王がしばしばこれについて言及してゐる。例へば Shalmanaser I (前十二世紀前半) はファシール神殿の再建碑文において Shamsi-Adad I の再建を 580 年前に、Erishum I より再建を更にその 159 年前と云つてゐる。また Esarhaddon (前七世紀前半) によれば、この同じ期間をそれぞれ 434 年および 126 年と云つてゐる。両者の差は 179 年であり、前者に従ふは Shamsi-Adad I は 1860 B. C. 後者に従ふは 1714 B. C. となる。この場合時代の近い前者の方がより正確であらうとは常識的に考へられる処であるが、その典拠となつた史料も後者の場合は五百年の間に前者の利用し得たものよりは遙かに減少してゐたことは明かである。<sup>(8)</sup> 然るにコルサバード史料の発見はむしろその逆の証拠を提供してゐる様に見える。

- (1) Archives Royales de Mari (AMR) I. G. Dossin : Correspondance de Shamsi-Adad (1946) II. Ch.-F. Jean : Lettres diverses (1941) III. J.-R. Kupper : Correspondance de Kibri-Dagan (1948) G. Goossens : Classement des Archives Royales de Mari (R. A. 1952)
- (2) Thureau-Dangin : Jasmah-Adad (R. A. 1937)
- (3) J. R. Kupper : Nouvelles Lettres de Mari relatives a Hammurabi (R. A. 1948) 及び AMR II no. 18.
- (4) -AMR I no. 3 の折斷文に「Igit-Lim は Ilakabkabu に罪を犯せる故に

神は Ilakabkab を配けたから、Iahdunlim の國を征服せしむ」と見え  
る(前表參看)。なほ L. Oppenheim : The Archives of the Palace of  
Mari (J. N. E. S. 1950) 130 頁など。又更に古く時代における Shamshi-  
Adad のローリア侵略は Shamshi-Adad より約十代前の Ilushuma の碑文に「……  
カレ、カマブーネ……と自由を獲たヤリタ」と見え( C. J. Gadd : History  
and Monuments of Ur (1929) 158. )

(5) S. Smith : Early History of Assyria 170-1. Table 4. 但し Weidner  
は巴比ロニ六十年におつて前者をさへする近へから Hammurapi (1955-191  
3) Shamshi-Adad I (1892-1860) といふ。E. F. Weidner : Zeitschrift  
bei B. Meissner : Könige Babylonians und Assyriens)

(6) Weidner は Thureau-Dangin の前説をとり「Der Synchronism-  
us ist dort einwandfrei bewiesen」といふ。[A. f. O. (1938) 198.  
Ann. 21] 但し Jacobsen は前二十紀前半における Shamshi-Adad I の死  
Synchronism を信用しない。Sumerian King List (1939) 193.

(7) Ishme-Dagan が父の死をその兄弟 Mari の子 Jasmah-Adad に譲ら  
せ手紙がある。J. R. Kupper. (R. A. 1948) 後、Shamshi-Adad I の死  
は Shamshi-Adad の Mari 征服以前になければならぬ。

(8) Rowton : Tuppu etc J. A. O. S. (1951) p 202 (n) 73  
(9) Shamshi-Adad の年名表に Mari を改めた記事のあるのは三十三年と三十  
五年であり、後者は「Mari の城壁を破壊した年」と記している。

[Ugnad : Datenlisten. nr. 135, 137. (R. L. A. II. s. 180-181)] 年名は  
前年の最大事件を以て名付ける習慣であつたとすればこれは治世三十四年に  
至る。

(10) Shamshi-Adad は法典の序文にアシシールおよびニネヴェを支配したことを  
述べている。(Col. IV. l. 55. および l. 60) 更に Larsa の知事 Sin-idin-nam  
に与へた命令書にアシシールの軍隊を助けて本隊に合せしめることを  
命じている (L. W. King : Letters and Inscriptions of Hammurabi vol-  
II no. 1 A. Ugnad : Babylonische Briefe. nr. 40) など彼の Shamshi-  
Adad を証立する。かうした事実は Shamshi-Adad I が強大な君主として

北大文学部紀要

健在であつた時期には考へられず、従つて Shamshi-Adad の強大をなしたのはその  
死後であるとの推定を裏付ける。なほ B. Meissner : Könige Babylonians  
u. Assyriens. 95. 頁など。

従来より文書に Rim-Sin, Hammurapi, Zimri-Lim などと同時代である事  
が確定されている Eshnunna の王 Ibal-pi-el の年代不明の年名に「Shamshi-  
Adad の殺した年」と見え (E. Ebeling : "Daten von Aschajy" (R. L.  
A. II, 195.) A. Ugnad : Eine neue Grundlage für die altorientalische  
Chronologie [A. f. O. (1940) 145.] 名は Sippar 出土の法律文書によれば  
Shamshi-Adad の即位十年に Shamshi-Adad が未だ在世してゐた証拠がある。

「Marduk...Hammurapi 及び Shamshi-Adad の名に宛つた [24] の  
如く誓約せよ」...Malgun の説かれた年の「Kohler-Ugnad :  
H. G. III nr. 710. Schorr : Urkunden nr. 284) の年名 Shamshi-Adad の年  
を檢するとの即位十年に達する (Ugnad : Datenlisten [R. L. A. II. 178  
nr. 112])

なほ Assur A 表によれば Shamshi-Adad I に到る Shamshi-Adad の王  
名は左の如くである。[III] の注 (c) の表を参照せよ。

|                |
|----------------|
| Puzur-Ashur I  |
| Shalim-akhum   |
| Ilushuma (a)   |
| Irishum I      |
| Ikunum         |
| Sharrukin I    |
| Puzur-Ashur II |
| Akhi-Ashur     |
| Rim-Sin (b)    |
| Irishum II     |
| [Assur]        |
| [Izkur-sin]    |
| [Irishum III]  |
| Shamsi-Adad I. |
| Ishme-Dagan I. |

(a) これが Shamshi-Adad 第一王朝の始祖 Shamshi-Adad と同時代人なることは L. W.  
King : Chronicles concerning the early Babylonian Kings. II. 14 頁  
S. Smith : Early History of Assyria. Chronological Table 4. 頁など  
Delaporte : Le Proche-Orient Asiatique. Tableau chronologique 頁など。  
(b) これは名を Larsa の Rim-Sin と同じくするものは B. Meissner :  
Könige Babylonians und Assyriens. 291. Ann. 4 頁など S. Smith : E.

H. A. 183-4を見よ。アッシリヤの王名は特徴的な形をもち、しばしば数名の王がこれを各乗リ<sup>(1)</sup> (例へば Adad-nirari を称するものは六人 Shamsi-Adad は五人 Tiglat-pileser は三人)<sup>(2)</sup>、ヌベロニヤの王名と合致するものは殆んどなく (Sharrukin, Ishme-Dagan は稀な例外)。Rim-Sin の名はアッシリヤ史を通じての場合只一回であることは一つの傍証となすに足りる。但し Khorsabad List にはこれを缺く。Ⅳの注(4)の表参看)

(1) A. Moortgat : Vorderasien 291 f. S. Smith : Early History of Assyria. 197 ff.

(2) Keilschrifttexte aus Assur historischen Inhalts, nr. 13.

(3) *ibid* nr. 51. 126.

(4) Meyer : Chronologie 16-17. Hall : Ancient History 28-29. Parrot, *op. cit.* 363-3. Jacobsen ; *op. cit.* 192-3.

# [Ⅳ]

これはシカゴ大学の東洋研究所が、1932/33のシーズンに Khorsabad (Dur-sharrukin) から発掘し、当時の所長故 J. H. Breasted と A. Poebel に翻譯出版を委嘱したもので長くその発表が期待されてゐたが十年後に漸くその約を果したものである。極めて良く保存された総七・二五時、横五・二五時のタブレットで、最古の Tudia の Assur-nirari V に到る百七人の王名が父子関係および統治年数その他と共に誌されて居り、その跋文に「アルベラの神殿書記 Kandianu がアッシニール総督 Adad-EN-GIN の第Ⅱ limmu の Lulubi の月の二〇日に、アッシニール市の王名表に抛り書写した」事が誌されてゐる。この日付は limmu list によれば Tukulti-apli-Esharra Ⅲ (王名表は百八代) の治世第七年と定む (738 B. C.)、これは従来知られてゐた Assur A 年と B 年とを比較すると一致し Poebel が Assur A の複本とあらうと考へてゐる。然るに発掘の際の不注意により (65) Assur-rabi I と (66) Assur-

nadin-ahhe の二代の統治年数が缺けてゐるものと、Assur A との不一致が問題を一層複雑化し、この重要な (39) Shamsi-Adad I の年代に關して種々の異論が生ずるに至つた。即ちテキストの校訂者 Poebel は 1726-1694 B. C. とし、Albright は二代の間隙に二十二年をあつて 1748-1716 とし、Smith は依然後代のアッシリヤ王の碑文によつて 1820-40の線を堅持してゐる。然し缺文は別として Assur A と Chorsabad Lis の何れを採用すべきか、或ひは後代のアッシリヤ碑文の信憑度など問題もあつた。

(1) The Assyrian King List from Khorsabad (J. N. E. S. 1942-1943, 又は E. Cavaignac : Les Listes de Khorsabad (R. A. 1945-6) A. Parrot Archeologie Mesopotamienne (1953) 347-365.

(2) これは大きく四つのグループに分けられ、第一は Tudia より Apishal に到る十七代で「テントに住んでゐた(遊牧の意か?)」と注されて居り、そのうち十五代までは従来全く知られなかつた名前である。父子関係・統治年数を缺く。第二は第二十六代に到る十五代父子関係が誌してあり、第三は三十二代 Iushuma に到る六人父子関係・統治年数を缺く。Poebel は三十三代の Erishum I に始る第四のグループ (父子関係・統治年数が完備する) から limmu list が始まると推定してゐる。

(3) Assur A は Khorsabad List の九十七代 Tiglatpileser Ⅱ を指し誌してゐるが、その次代 Assur-Dan Ⅱ の治世のものであり、B は断簡であるが更に六・七代古いと考へられてゐる。

(4) Parrot, *op. cit.* 352. その相違の箇所を表示すれば次頁の表の如くなる。

(5) J. N. E. S. (1942) 293. 又は G. Dossin がこれを支持する Correspondance de Shamsi-Adad I. (1726-1694 a. J.-C.) [Bulletin de la Classe des Lettres, Academie royale de Belgique, 1948. 59-70 (未見)]

(6) Bibliotheca Orientalis (1948) 125. 又は Rowton も前掲論文(Ⅱ注(6))におつてこれを支持してゐる。Rowton 論文については三笠宮の紹介

| Chorsabad (a)      | Assur A (b)     |
|--------------------|-----------------|
| 30) Puzur-Ashur I  |                 |
| 31) Shalim-Akhum   |                 |
| 32) Ilushuma       |                 |
| 33) Erishu (I)     | (1) Erishu I    |
| 34) Ikunum         | (2) Ikunum      |
| 35) Sharrukin I    | (3) Sharrukin   |
| 36) Puzur-Ashur II | (4) Puzur-Ashur |
| 37) Naram-Sin      | (5) Ahi-Assur   |
| 38) Erishu II      | (6) Rim-Sin     |
| 39) Shamsi Adad I  | (7) Erishu II   |
| 40) Ishime-Dagan I | (8) [ ] Assur   |
|                    | (9) Izkur-Sin   |
|                    | (10) Erishu III |

a) A. Poebel : The Assyrian King List from Khorsabad (Journal of Near Eastern Studies, 1942.)

E. Cavaignac : Les Listes de Khorsabad (Revue d'Assyriologie, 1945-6)

b) E. F. Weidner : Die grosse Königsliste aus Assur [Archiv für Orientforschung (1927)]

がある(史学雑誌第61巻第12号)。

(7) Alalakh and Chronology (1940) A. J. A (1945)

(8) Ⅲの注(11)(12)(13)(14)勿論後代の筆写・逆算に拠る記録の多くは信頼すべきではない。例へば新メソポタミアのナホイドスはアッカドのサルモンを自分より三千二百年以前(即ち3750 B. C.)と計算し(L. W. King : History of Sumer and Akkad 61.)<sup>6)</sup> アシリヤをメソポタミア以前七百年(即ち2225 B. C.)と計算しているが(L. W. King : History of Babylon, 110, 111)これも甚しく過大である。

# [V]

シリア考古学の発達によつてオリエントの比較層位的研究がエジプト・メソポタミアから更にクレタにまで拡大され、この広大な地域に渉る比較研究が確立されつゝあるのは第二次大戦後の注目すべき事実である。<sup>7)</sup>

S. Smith は北シリアの Alalakh (tel Atchana) の発掘に基いて次の如き重要な事実を明かにした。<sup>8)</sup> 即ち Ugarit (Ras Shamra) の層位的研究に拠れば、メソポタミアの影響が現はれるのはエジプト第十二王朝のシリア撤退 (c. 1800 B. C.) 以後であり、従つてハンムラビのシリア支配は当然それ以後と想定され、これは Alalakh の結果と一致する(左表)。<sup>9)</sup> Alalakh の発掘者 L. Woolley も強くこれを支持してゐる。

|                                     |
|-------------------------------------|
| Level VIII                          |
| 第十二王朝期                              |
| Level VII                           |
| Yamkhad の宮殿 (ハンムラビ時代) <sup>6)</sup> |
| Level VI                            |
| Megiddo X, IX <sup>6)</sup>         |
| Murshilish I の攻略 <sup>7)</sup>      |
| Level V                             |
| Thutmes III の攻略 (1468)              |

更に Smith は南部クマタの Messara 平原の Tholos B 出土のバビロン第一王朝時代のシリンドラーが、エジプト第二中間期 Second Inter-



# [VI]

バビロン第一王朝が第十一代 Samsuditana の時ヒッタイトの Mursilis 一世の急襲によつて亡び、以後バビロニア史が大きく転廻し「山岳民族」争覇の舞台となつたことは広く認められてゐる。<sup>(1)</sup>このバビロン王朝の終末を劃する重要な年代は諸家によつて色々な推算がなされてゐるが、A. Goetze は最近 Shuppluliumash 大王 (前十四世前半) の年代からの逆算によつて重大な手掛りを提供した。

従来はバビロン第一王朝の終末を (Mursilis の入寇) c. 1800 B. C. に置いたため、後のアマルナ時代におけるハッチ興隆期との間に大きな間隙が考へられ、前十九世紀前後の古王国、前十四・五世紀の新王国の二つの時期が想定されてゐた。<sup>(2)</sup>然るにマリ文書およびコルサバド・リストの発見によつてハッチ史の上限が著しく引下げられた結果この間の間隙は消滅するに到つたが、然もその下限はトトメス三世のシリヤ征服記録やアマルナ文書によつて確定してゐる以上、これより逆算すればその上限には自ら限界がなければならぬ。

先づ Götze はムルシルのバビロン荒掠についで代表的紀年として Thureau-Dangin (1650 B. C.) Ungnad-Smith (1595 B. C.) Albright (1531 B. C.) Weidner-Böhl (c. 1500 B. C.) の四つを挙げ、これがハッチ史に適合するか否かを検討してゐる。ハッチ史初期の王統は頗る混乱してゐてバビロニア・アッシリヤの如き探るべき史料が少ないが、彼はボガツケウイ出土のヒエログリフで書かれた Nisantas 文書によつて Tudhaliyash II から Shupp iliumash (Götze によれば 1390-1350 B. C.) に到る四王を父子継承の四代と考へる。Tudhaliyash II がエズブト第十八王朝のトトメス三世 (1485-1450) と同時代人である事は両者の歴史的碑文によつて確定されてゐる。これからムルシル一世までは合計

十一(九)人の王名が知られてゐるが、その内五人については父子關係が分つて居り、又これ以外に二人の王妃が知られてゐるので、<sup>(3)</sup>少く共この間に七代の経過があつたことは確實である。そして Tudhaliyash II の下での所謂「新王国」の勃興はトトメス三世の陵夷以後、即ち 1450 B. C. と考へられる。ムルシル一世はこれより七代前であるから、この間をほど二百年と計算することは妥当であり、こゝに 1650 B. C. なる紀年を得る。即ち Thureau-Dangin のものが最もよく条件を満し、次いで A. Ungnad. と S. Smith の 1595 B. C. も亦なほこの範囲に入るが、それより新しい年代は到底考慮の余地がないといふ。

- (1) A-Moortgat. op. cit. 350-351.
- (2) A. Goetze : The Predecessors of Shuppluliumash of Chatti (Journal of American Oriental Society 1952)
- (3) L. Delaporte : Le Proche-orient Asiatique, chap. II Du XVIII<sup>e</sup> au XV<sup>e</sup> Siècle (p.p. 152-163)
- (4) Wilson : Burden of Egypt (1951) 年表参照。
- (5) ハッチでは王妃の位は一代一人の定めであつたので King List と並んで Queen List が頗る重要な地位を占めてゐる。(Götze. op.cit. p. 96 n. 3)

# [VII]

以上の如くにしてバビロン第一王朝の紀年は全体として約二世紀引下げられ、所謂暗黒時代と考へられた Gap が消滅した事は大きな収穫である。然しまた同時にこれによつてアマルナ時代直前のオリエント政治史に根本的検討が必要となつたことも亦事實である。大体の傾向はハンムラビの時代を引下げて c. 1800 B. C. 以後に置くこと点においてはほぼ一致してゐるが、これについてもなほ「王名表」に拠る諸学者の側からは理由ある不信が表明されて居り、<sup>(4)</sup>Low Chronology を代表する Alb-

right も瀕々として諸説の訂正を發表してゐる現状を思へば、<sup>(4)</sup>絶対年代の決定に到るまでには相当の時日を必要とするであらう。従つてウールソンがエジプト史において 2000 B. C. 前後の時代には十年、1500-1000 B. C. についても十年乃至十五年の<sup>(5)</sup>フイを認め、モートガルトがバビロニア史について前三千年紀には百年単位の、前二千年紀には十年単位の<sup>(6)</sup>フイを容認してゐる態度は増らしくは認めなければならぬまい。

結局ハンムラビ紀年の問題は「決して議論の余地のない新事実の発見によつてではなく、それ自身としては部分的証拠力しかもたぬ事実の推積ねによつてのみ解決せられるであらう。」<sup>(7)</sup>

(1) 例へばハンムラビはメソポタミヤの完全な支配者である様に考へられて来たが、Mari 文書その他に拠ればその支配権の内容は彼自身が法典序文に誇つてゐる程には絶大なものでなく、シュメル・アツカッド時代の覇者と左程異ならなかつたのではあるまいか。またアナトリア・シリア等に対するハンムラビの支配も或ひは単にウル第三王朝以後形成されて来たバビロニア世界—バビロンをその内の一勢力として、他にイシン・ラルサ・マリ etc を含むところの—全体の影響として見らるべきものではなからうか。マリの王 Zimri-Lim のバビロン駐在大使が当時の政治情勢を報告した手紙に「バビロンのハンムラビに従ふもの十一十五王、ラルサのリム・シンに従ふもの同じく十一十五王、これに対して Yamkhad (Alalakk) の Yarim-Lim に従ふ王は二〇人に達する云々」と言つてゐるのは示唆的である (L. Woolley: A Forgotten Kingdom, 67.)

(2) ソグイエトの古代史家ストルガーエも Smith 説 (1792-1750 B. C.) を支持してゐる。La datation de la I<sup>er</sup> dyvastie babylonienne (V. D. I. 1947 1.) [R. A. (1950) 102 による] 但し K. Ploetz は A. Moortgat (op. cit. Zeittafel) と共に Albright 説 (1726-1686 B. C.) を採つてゐる。Auszug aus der Geschichte (1951) 51.

(3) Th. Jacobsen : The Sumerian King List 191-194, 193. n. 6 a.

(4) W. F. Albright : The Chronology of King Hamurapi (Bibliotheca Orientalis 1948.) 彼は 1942 年に三回目の訂正を試み (A Third Revision of the early chronology of Western Asia) 1952 年に 1938 年の最初の論文 (A Revolution in the Chronology of Ancient Western Asia) 以来七回目の訂正を出してゐる (Further Observations on the Chronology of the early Second M. B. C. [未見])

(5) J. A. Wilson : The Burden of Egypt. (1951) vii.

(6) A. Moortgat : Aegypten u. Vorderasien. (1950) 315.

(7) M. B. Rowton : op. cit. 203.